

みおもてがわ

三面川のサケ漁と「種川の制」

松浦茂樹

(建設産業史研究会 代表)

はじめに

新潟県村上市を流下する三面川は、サケの遡上する川として有名である。その生態、歴史、現状、またサケとの関わり文化などは、市内にあるイヨボヤ会館で詳しく紹介されている。イヨボヤとは地元でサケの意味で、日本最初のサケの博物館として昭和六二年（一九八七）に開館され、毎年一〇万人前後が訪れている。また三面川サケ漁については、既に何冊かの書籍で述べられている。このため今さら論考とする必要はないかもしれないが、河川研究者の立場から若干の新たな考察を加えながら述べていきたい。特に、近世後半に行なわれた世界最初の計画的なサケ産卵場の

整備（種川の制）を中心に述べていく。

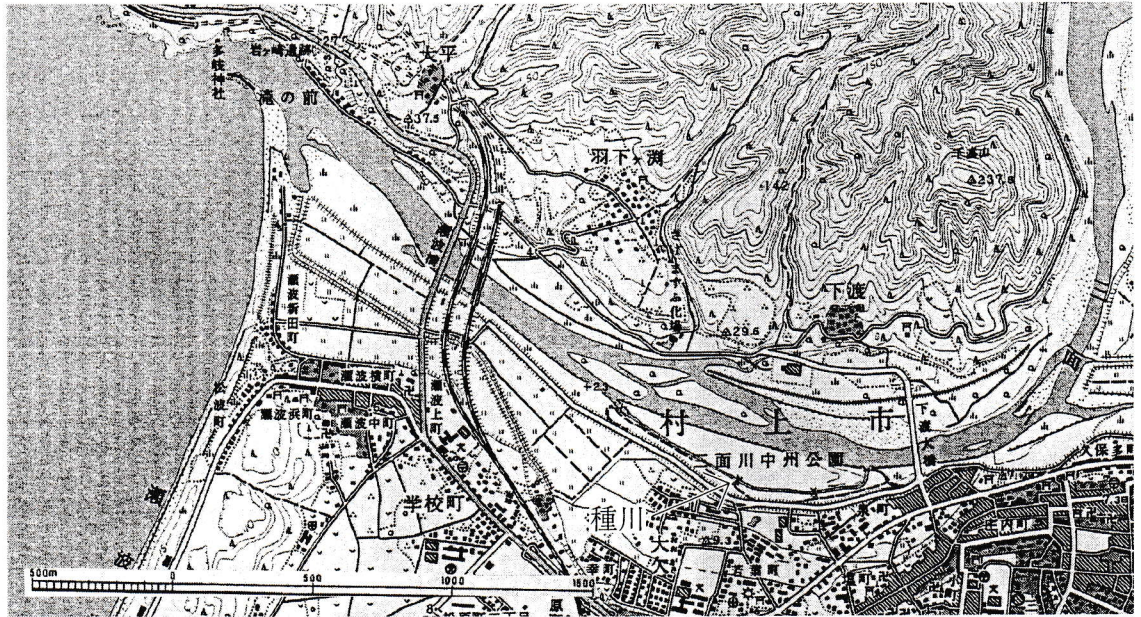
三面川の概要

三面川は、水源を山形県境の朝日連峰に発し新潟県村上市を流れる流域面積六七七km²、幹川延長約五〇kmの日本海に流出する二級河川（管理は新潟県）である。その途中、朝日区（旧朝日村）で小揚川、長津川、滝矢川、高根川を合流し、村上区（旧村上市内）で山田川、小谷川、門前川を合わせる。その山地は、花崗岩類とともに中古生層の地質が発達する。

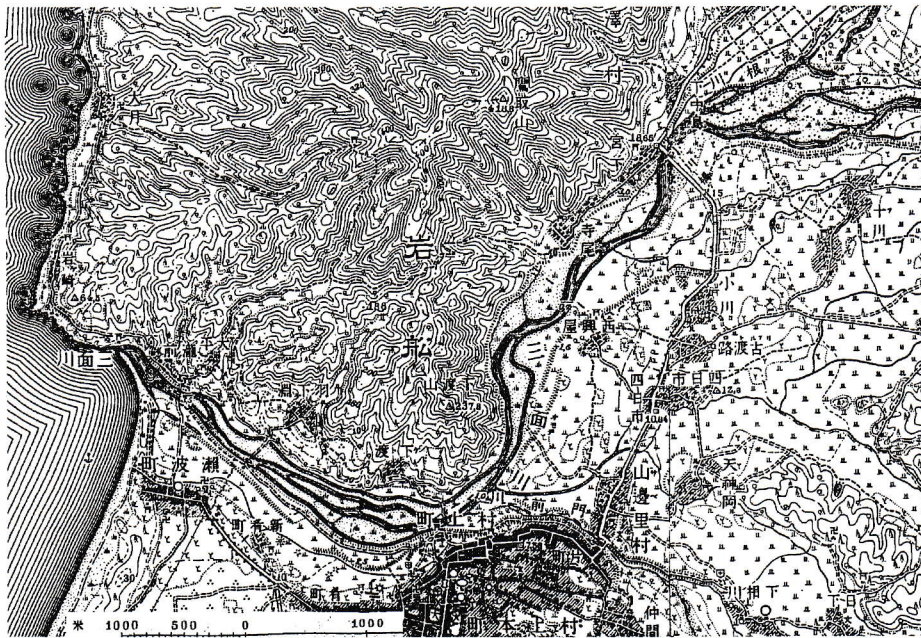
昔は瀬波川や布部川と呼ばれ、三面川と呼ばれるようになったのは近代になってからである。河口より約五、六〇〇m地点にあたる

村上地区と朝日地区の境を俗に御境（おさかい）と称するが、御境は村上藩と天領との境を意味している。その下流部河道が、近世後半に鮭の産卵場である種川として整備された。現在の下流部は、図1のような状況で、左岸に水路が整備されて種川（写真1）として利用されている。その河床は、中古生層の山地から流出した小砂利よりなっている。

なおこの河道状況は戦前と全く異なっている。大正二年（一九一三）に則図された図面は図2、図3に示すが、下流部では濬筋は4筋に分かれ、河口部近くで1本に合流して海に注ぐ。この形状は、人工的に整備されたものである。また堤防は左岸に不連続となつて存在する。



▲図1 現在の三面川下流部河道状況図(三面川中洲公園の南岸側にある水路が種川)(一九七六年測量、一九九五年修正の国土地理院2万5千分の1「村上」から作成)



▶図2 戦前の三面川中・下流部河道状況図(一九一三年測量、一六年発行の5万分の1地形図「村上」「塩野町」から作成)



▲図3 戦前の三面川下流部河道状況図(図2のうち最下流部)



写真1 現在の種川 (撮影：遠山彩嘉)

近世までのサケ漁業

越後国(新潟県)のサケは延長五年(九二七)に成立した『延喜式』にも掲載され、越後の代表的な貢納すべき産物として記述されている。長寛三年(一一六五)の南部文書には、瀬波河(現三面川)のサケ漁について、「漁鮭為重色済物」(都への重要な貢ぎ物の意)と述べられている。

さて、近世の状況について須藤和夫著『三面川サケ物語』(朔風社、一九八五年)に基づいて簡単にみていこう。豊富にとれるサケ

は村上藩にとって重要な収入であった。当初は、雑租としての漁獲に「鮭川役」なる税金を課した。だが寛文年間(一六六一〜七三)になって、河口から約六kmの河道に対し「運上金」を課した。「運上金」とは、年ごとのサケの漁業権を入札にし、最高額で落札した入札者がその金額を藩に納入する制度である。この運上金額からサケの収穫量が推測できる(図4)。

元禄一五年(一七〇二)には一六六両、翌一六年には二四六両、宝永五年(一七〇八)は七八両と減少したが、翌年には一八四両、正徳二年(一七一二)二七四両、同五年三二五両、享保三年(一七一八)には一九二両であった。ところが、その後享保五年、内藤氏が村上藩主となってから一気に一〇両、二〇両と減少し、元文元年(一七三六)には五両三分と落ち込み、同三年には入札停止となつてしまった。この状況は明らかに乱獲の結果である。入札停止は寛保元年(一七四一)まで続く。

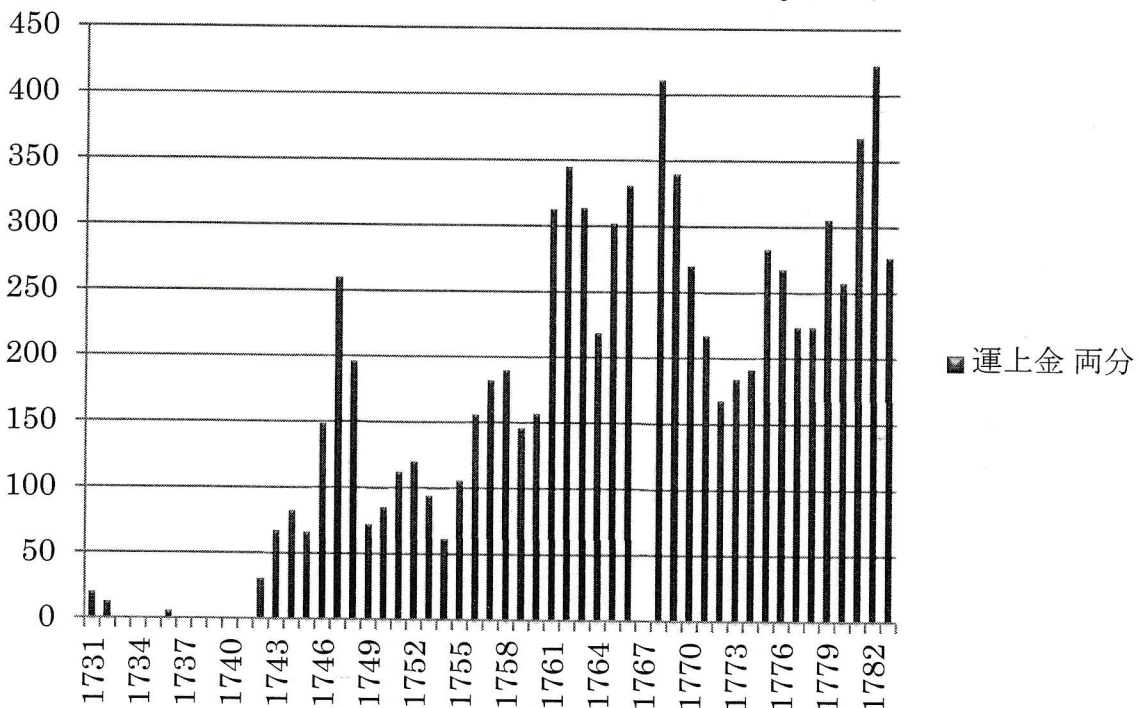


図4 近世運上金の移り変わり (『村上市史資料編1』に基づき遠山彩嘉が作成)

ところが宝暦十一年（一七六一）に三〇〇両台に回復し、明和三年（一七六六）には三三〇両となった。寛政八年（一七九六）には一、〇〇〇両台となり、天保・弘化・嘉永・安政の一八〇〇年代は二、〇〇〇両を大きく突破する年が多くなった。そして明治二年（一八六九）には五、六〇〇両に達した。享保年間後半から宝暦年間初めにかけて大きく減少していたのが、急激に回復していったことが分かる。その背景には、「種川の制」と呼ばれるサケ保護政策があったのである。

近世後半の種川の整備

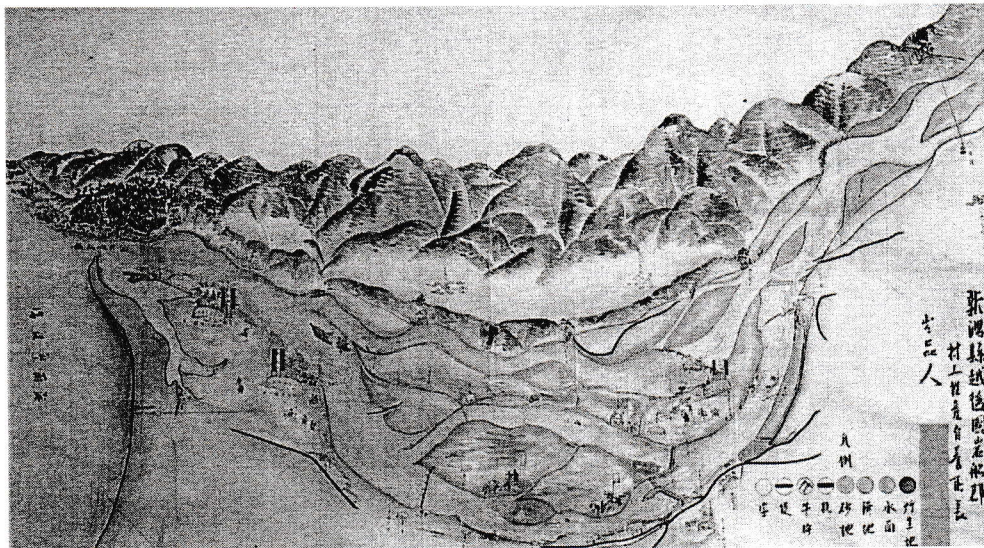
近世当初の元和五年（一六一九）、村山城主は堀氏であったが、「鮭の稚魚を捕ることを固く禁ずる、捕っている者を見付けたら通報せよ、通報者には銀子一枚をやる」との内容の制札が立てられた。この頃にもサケの稚魚を大事にすべきことが認識されていたことが分かる。

そして近世後半、産卵場所の確保のための種川の整備という積極的な保護政策が取られたのである。

河道状況と種川整備

絵図1は、文化五（一八〇八）年当時の種川状況を現したものとされ、また文化七年の

種川図が図5である。種川絵図・図は、漁場の入札を行う前に藩役人の内見に備えて作られたものである。



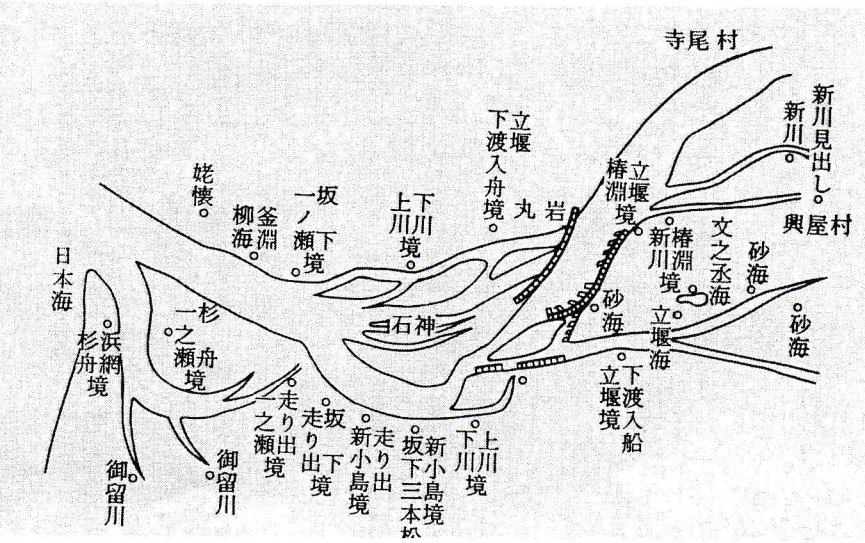
絵図1 文化五年（一八〇八）の鮭川（三面川）河道状況図（出典：『三面物語』新潟県）

さて、これら絵図・図両方からみて、河の中を一見すると、扇状地河道からその下流につながる移化帯河道のようである。扇状地河道では、表流水は細い滲筋になって広い石礫の川原を幾筋化に分かれて流れる。伏流するものも多く、扇状地末端部分そしてその下流部で湧き出して表流水となる。このような扇状地河道は、山地から低地に出たところで発達するが、三面川では河口に近い下流部に展開するのである。そして扇状地河道はその直下流で合流し滲筋は一つになる移化帯河道なるが、これら絵図・図でも同様な形状になっている。口伝えとして、この河道は宝暦一三（一七六三）年から寛政（一七九四）年にかけて造られたとされている。

絵図1には、下（南）の2筋の滲で上下流に複数の柵が作られている。上流部にあるのは、サケが上るのを防ぐため密に打たれた柵（密柵）で、下流部にあるのがサケが入れる柵であり、この区間が種川である。一方、上の方の滲筋にも一つの柵がみられるが、その上下にはない。おそらく、この柵は遡上してくるサケを採捕するためのものだろう。

図5は、絵図とは二年しか変わらないとされているが、河道の状況は大きく異なっている。洪水によって河道の滲筋が大きく変動したと考えられるが、柵は設置されていないので、柵でもって種川を整備する前の状況を現して

図5 文化七年（一八一〇）の鮭川（三面川）河道状況
 （出典：鈴木鉀三『三面川の鮭のはなし』）



いるのだろう。主流部と考えるとよい澗筋の少し上流部の河岸は、おそらく木杭で整備されているのだろう。澗筋を安定させるのに大きな困難をとまなうことがうかがえる。現在の河道で河床勾配をみると、河口から

門前川が合流する三・四km区間で六五〇分の一、その上流二・〇km区間で五七〇分の一、さらにその上流二・〇km区間が四七〇分の一となっている。この勾配そして河状からみて、現状では河口部から移化帯河道が三・四kmであり、その上流に勾配が緩やかな扇状的河道が拡がっていると考えられる。だが絵図1、図5でみると、現在の移化帯河道の区間でも扇状地河道の様相を示している。扇状地河道の形成は上流から流出してくる土砂の量によっても異なるが、人工的に整備した結果と判断される。

果たして、このような人工的整備が可能かどうかであるが、利根川では今日でも澗筋がいくつかに分かれ扇状地河道の様相を示している妻沼付近の勾配は六〇〇分の一より緩やかである。このことから人工的整備は十分可能と考えられる。

さて、サケの生態をみると、メスは産卵が終わると産卵床の上流側の小砂利を掘って受精卵の上を覆い、小高い山を作って外敵から守る。このためサケの産卵場としては、川底が小砂利であって湧水があり、土砂の堆積が生じないところが適するといわれている。湧水によって新鮮な水が供給され、卵が埋まることはない。

三面川下流部はサケの産卵にとって格好の場所と考えてよいだろう。古・中生代の地質

からなる山地部があり、ここから出た堆積物は小砂利となって三面川下流部に堆積する。さらに豊富な湧水があった。河口からほど近いところに、産卵場を準備できたのである。ただし、このような河道を維持し安定されるのは並大抵ではない。洪水のたびに運搬されてきた土砂の堆積があり、澗筋は容易に変化する。毎年、藩によりかなりの経費でもって維持されていたのは間違いない。

明治五年（一八七二）、旧藩士たちがサケ漁の権利を得たが、明治になって藩による維持は行なわれなかつたので、河道はかなり荒れていたのだろう。彼らは河道の整備に三、七六〇両の莫大な資金が必要であったと述べている。このことから、種川の維持は大変だったことが分かる。

なお種川の整備について、明治六年四月旧村上藩士からの願書「旧村上藩領中鮭漁場定式諸營繕其外取扱方大略申上候」に次のように述べられている。

最下流部三〇町（約三km）の区間について、文化五年（一八〇八）初めて種川の方法を発見し、一筋の流れであったところを三筋（下渡河二〇町余、堀川五町余、新規掘割）に分流させ、三か年の間、サケ漁を禁止し、四年目に古川筋で長さ五町余を種川にした。そしてサケは寒い時期に孵化し、翌年四月に海洋に出て同年九月に元の川に帰ってくる。

青砥(あおと)武平次(一七二三〜一七八八)と「種川の制」

種川の制度を考案したのは、村上藩の武士である青砥(あおと)武平次といわれる。明治時代に作成された資料に基づくものだが、先述したように明治六年の旧藩士の願書には文化五年に種川の方法を発明したと述べられていて、青砥の存命時期と重ならない。このこともあり、青砥と種川制度との関連を否定する意見もあった。だが近年、山形県鶴岡市でその関連をはっきりさせる古文書が発掘された。『宇治家之記』である。

そこには、青砥が御止川の方法つまり種川を造り、そこに産卵させる方法を始めたこと述べられている。この文書は、寛政九(一七九七)年に大庄屋・宇治勘助が、この方法を見習ってはどうかと庄内藩に上申したものである。庄内藩ではこの献策を受け、文化三年(一八〇六)月光川の支川滝淵川と牛渡川を種川とし、川の上下にすだれを張って整備した。そしてここに、下流で採捕した鮭を運び産卵させたのである。

この文書で特に注目したいことは、サケの生まれた川への回帰について、昔から言い伝えられていると記述されていることである。サケの回帰について、古くから何となく知られていたことが分かる。青砥はこの言い伝えを信じ、種川を整備していったのであろう。

種川として、図5のような整備が初めから行なわれたと考える必要はなく、もっと簡単なものだっただろう。産卵から海への流下までの時期は、晩秋から早春である。この時期、大きな洪水はないが、中小洪水はある。孵化し稚魚になるまで、洪水に襲われない澆筋が必要である。当初は自然にできた澆筋で行われたと思われるが、さらに人工的に分流の整備が行なわれていったのであろう。

近代の三面川のサケ漁業

明治から戦前のサケ漁業

明治時代になって、三面川鮭漁業権は旧村上藩士たちが担うこととなった。明治五年(一八七二)には、入札で新潟県からこの年の漁業権を民間人が得たが、その民間人から権利を譲渡してもらった。この年、先述したように川の整備に三、七六〇両を投じたという。翌年には藩士たちは、川の整備について責任をもつて行うことなどを力説し五年間の漁業権を願いだした。この年は一年間の漁業権であったが、翌七年からは永年の許可を得た。一五年には、旧士族一同(約七〇〇戸)でもって村上鮭産育養所を組織しサケ漁を続けていった。

一方、この年以前の明治九年(一八七六)、人工ふ化の技術が日本に伝えられ、東京・札

三面川鮭漁獲高

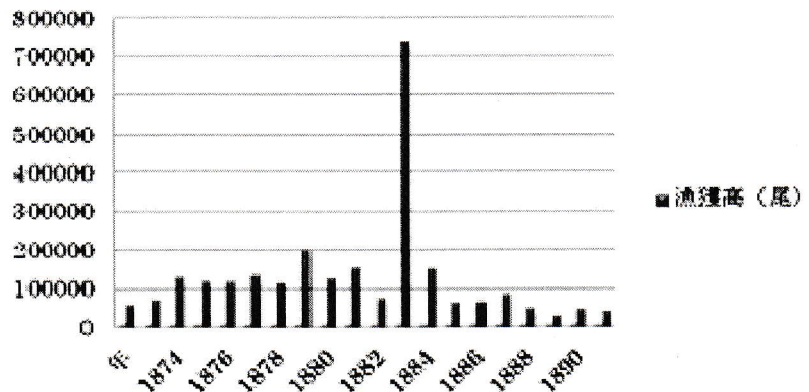


図6 明治当初のサケ漁獲高(『村上市史資料編1』に基づき遠山が作成)

幌で試験的にふ化が行なわれた。これを知った旧藩主たちは人工ふ化も必要と判断し、一年にはふ化場を設置し、中央からの技術指導を受けて人工ふ化に成功した。これは試験場を除いて日本で最初の人工ふ化であり、採取された受精卵は全国に送られた。この後、三面川では、種川での天然ふ化と人工ふ化との二本立てで進めていったが、種川として図

3のような河道が整備されたのである。

村上鮭産育養所は、技術の提供にも積極的であった。種川の制は、明治一二年（一八七九）には北海道渡島半島の遊楽部（ゆうらつぷ）川に移出された。その成績がよかったため、二一年までに道南を中心に約四〇河川で種川の制が行なわれた。また新潟県下の各河川のふ化場で使用するサケ卵は、すべて村上鮭産育養所から配布されるものが使われた。その後、三四年には、県営のサケ人工ふ化場が新設され、育養所と併せて供給能力を高めていき、三面川は新潟県下各河川におけるサケ漁の親川の役割を担ったのである。

三面川における明治初めのサケ漁獲高は図6に示す。明治六年（一八七三）は五万四千尾余りであったが、その後の数年は一、二、三万尾で推移している。一七年には七三万七千尾余りと驚くべき漁獲量となっている。このとき鮭一尾と大根一本が交換されたという。

旧村上士族は、地元の教育にも熱心であった。明治一一年には山林を売って小学校を作り、また翌年中学支校を設立した。この支校は村上私学校となり、四三年の県立村上中学の設立まで続いた。また授業料援助、奨学金貸与などの育英資金制度を創立し、子弟の教育に励んだ。サケ漁により得た利益を教育につぎこんだのである。その恩恵を受けた人々を「鮭の子」と呼んでいる。

戦後の三面川とサケ漁

昭和二四年（一九四九）、漁業法が改正された。三面川では旧藩士による漁獲権の独占が廃止され、流域住民からなる新たに3つの漁業協同組合（三面、大三面、村上鮭産）が結成された。だが、それまで熱心に行なわれていた稚魚の放流が一気に減少していった（図7）。また乱獲や密漁が続きサケ資源は枯渇の道をたどり、漁獲高は二三年に一万尾を割ったのち二九年にはついに一、〇〇〇尾を割る状況となった。三面川も昭和二〇年代から治水を目的として改修が行なわれ、昭和三八年修正の国土地理院発行の五万分の一の地形図では図8のように、戦前まで保たれていた種川としての河道が大きく姿を変えてしまった。昭和二〇年代から三〇年代にかけてサケ漁は絶滅寸前といわれたのである。

ここに至り、3つの漁業協同組合は昭和三八年（一九六三）に合併して三面川鮭産漁業協同組合となり、ふ化事業の合理化により増殖対策が進められた。五二年からは河口から二kmの場所に、濡筋いっばいに柵を設置して行う「一括採捕」が行なわれた。また三面川では五二年に改修が行なわれ、種川として河道に新たに水路が整備された。これらにより採卵数も増大し、川でのサケの捕獲高一万尾台にまでに回復した。近年では毎年約三〜四万尾が捕られるまでになっている。

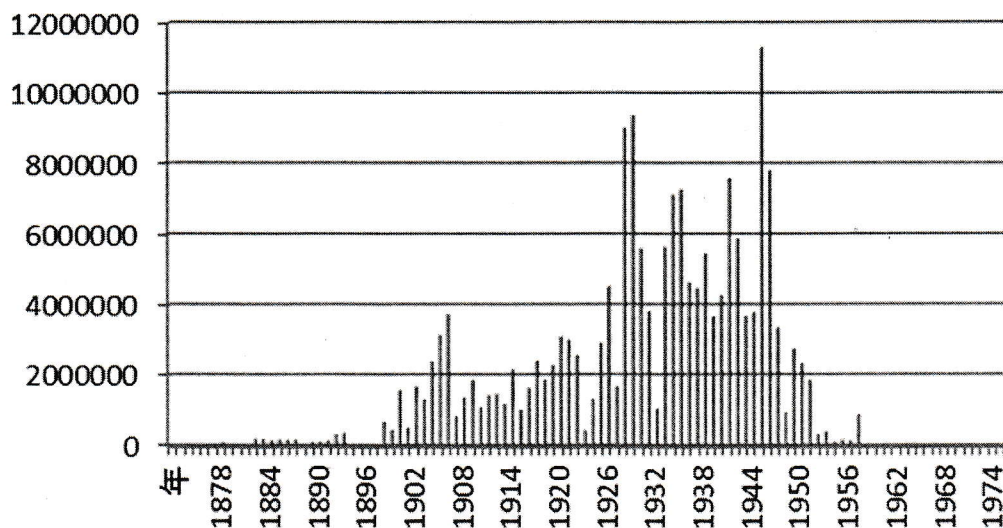


図7 稚魚の放流数(尾) (三面川の鮭の歴史に基づき遠山が作成)

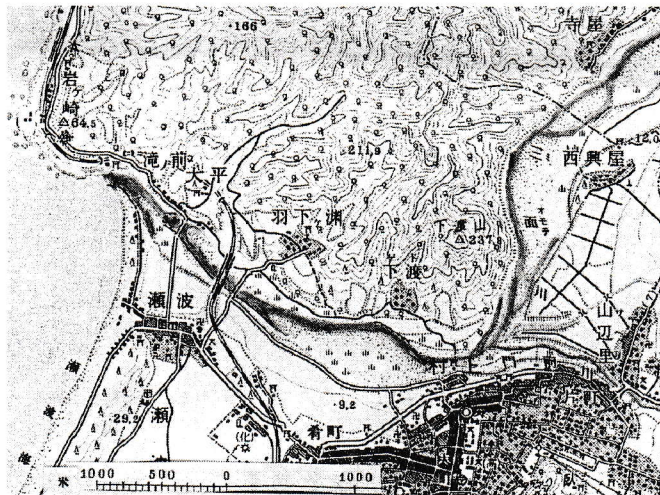


図8 戦後の三面川下流部河道状況図 (5万分の1地形図
[村上] 1963年修正から作成)

なおサケは、三面川に遡上する以前に河口での定置網や刺し網により海でもとれる。先の捕獲高は川を遡った数なので海で捕れた数を含めると、より多くのサケが三面川に帰って来たことになる。昭和五二年から海と川の漁協が共存共栄のため協同でサケ資源を守り、殖やす施策が始められた。海面漁業者が成熟卵の無償抛出、また協力を支払うこととなったのである。さらに五八年からは、河口に設置する定置網の間口を四〇〇mから八〇〇mへと広げていった。

おわりに

近世後半に編み出されたサケの産卵場の整備、種川の制についてみてきた。サケはほぼ四年後に母川に産卵のため戻ってくるこの習性を理解し、このような整備を行ったことに驚きを禁じ得ない。

最後に、「鮭の子」について少し述べておきたい。明治になって漁業権を得た旧村上藩士たちは子弟の教育に熱心であり、その援助を得た人々が「鮭の子」と呼ばれた。この中に『朝鮮史』全35巻を編さんした稲葉岩吉などがいたが、その一人に明治から大正にかけて内務省技師として活躍した近藤虎五郎（一八六五〜一九二二）がいた。今日では忘れさられているが、内務省勤務当時、要職について日本の「国土づくり」を指導した。筆者の専門がら、「鮭の子」の一人に彼の名前を見つけて、三面川サケ漁が急に身近に感じられた思いである。

彼は、明治二〇年（一八八七）、東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業し、その後2年間、私費でアメリカに留学したのち内務省に入った。内務省では若い時期を除いてほとんど東京の本省で勤務し、主に府県土木事業を指導した。また臨時治水調査会、都市中央委員会など各種の委員会に委員として参加し

た。一方、大正六年（一九一七）からは東京帝国大学工科大学教授を兼任し、後進の教育にも関与した。

明治三二年には工学博士となったが、論文審査に基づく初めての工学博士であった。夫人は、帝国大学二代目総長加藤弘之の三女である。『内務省直轄土木工事略史・沖野博士伝』（一九五九年）では、近藤は次のように紹介されている。

「氏は府県に対しては大勢力があり、直轄工事の沖野博士に匹敵する位であったが、僅々五十八で病死せるは国家のため惜しき限りであった。」

なお沖野とは、近代国直轄河川事業の父といわれる沖野忠雄である。

参考文献

- 鈴木鉀三『三面川の鮭の歴史』財団法人イヨボヨの里開発公社、1982年改訂版
- 鈴木鉀三『三面川の鮭のはなし』村上市郷土資料館、1983年
- 須藤和夫『三面川サケ物語』朔風社、1985年
- 『村上市史資料編1古代中世編』村上市、1999年
- 横川健『三面川の鮭』2005年
- 遠山彩嘉『村上市の鮭と人』東洋大学卒業論文、2011年
- 『沖野忠雄と明治改修』土木学会、2010年